

東日本大震災

追悼式

追悼の言葉
遺族代表 松林 聖佳 さん



東日本大震災から7年が経ちました。あの日は先輩方の卒業式があり、部活動が休みでした。ちょうど母も仕事の帰りが早く、久しぶりに浪江ばあちゃんの家に行く予定でした。

体験したことがない大きな揺れに襲われ、大きな津波が押し寄せました。この地震と津波により、たくさんの方々が亡くなりました。そして私の大好きな3人の命も奪ってしまいました。いつもおしいご飯を作ってくれて優しく話しかけてくれたばあちゃん。ちょっと怖いけど一人でお泊りに行くといろんな所に連れて行ってくれたじいちゃん。遊びに行くとき必ずアイスを買ってくれたひいじいちゃん。小さい頃は毎月のように一人で泊まりに行っては、畑や田んぼについて行きましたが、中学生になつてからは勉強と部活が忙しく、なかなか泊まりに行くことはありませんでした。最後に会ったのはお正月。

またゴールデンウィークに、田植えのお手伝いのために泊まりに来るとばかり思っていました。しかし、あの日を境にもう一生会えなくなってしまうました。私は大好きだった3人が津波にのまれ、亡くなったなんて、もう会えないなんて信じたくもありませんでした。きつと、苦しくて冷たくて怖かったです。この前、震災後初めて浪江へ行ったとき見た光景は忘れられません。見慣れた風景はなくなり、復興のためのたくさん工事車両が走っていました。この時改めて、震災の恐ろしさを実感しました。当時中学2年生だった私は、もう社会人になりました。今3人が生きていれば、自分の成人式の晴れ姿を見せに行けたでしょう。自分の車で自由に遊びに行けたし、田植えの時期は、今までできなかった軽トラに苗を乗せ田んぼに行くというお手伝いもできたでしょう。休日はじいちゃんとお酒も飲めたでしょう。もっともおばあちゃんたちとやりたかったことがあります。しかし、どんなに願ってもおばあちゃんたちは帰ってきません。

ただ私たちにできることは、この東日本大震災を忘れることなく、亡くなった方々の分まで一生懸命生きていくこと。そして自分が結婚し子や孫ができたとき、あの震災があったことを伝えてゆき、忘れ去られないようにしていくことだと思います。

行方不明者の特別捜索が行われました



東日本大震災から7年となる3月11日、福島県警察本部主催による行方不明者の特別捜索が行われました。

特別捜索には、浪江町を始め県内各地の警察署や双葉地方広域市町村圏組合消防本部など関係機関が参加し、町役場駐車場で集結式後、請戸地区に移動して捜索を行いました。

今回の捜索では写真や名前の入った会員証など、行方不明者の手掛かりとなるようなものを発見することができました。